

リプロダクト推進室の取り組み

スペース

廃材を什器に利活用



(株)スペース（東京都中央区）は、「捨てない空間づくり」という考え方のもと、自社のものづくりを見直す「リプロダクト推進室」を2023年に発足し、廃棄物の抑制を念頭に置くなど、空間づくりの概念そのものを変える仕組みを構築している。直近では7月に

「モレラ岐阜」（岐阜県本巣市）で、退店したテナントの壁面装飾や棚板などを活用し、通称・リプロ什器に生まれ変わらせた。こうした取り組みを通じ、商業施設や環境にやさしい活動を進めていく。

リプロダクト推進室は、「環境負荷の低減」（設計

・施工時の廃棄物抑制）、「持続可能な調達の推進」（モノや空間の2周目以降を見据えたものづくり）、「多様性の尊重」（あらゆるリプロダクト）に関連

モレラ岐阜に設置したリプロ什器

する取り組みの活性化）の3つを指針に、「捨てる」という概念のない空間づくりを目指している。従来のものづくりのあり方を見直し、スペースが有するデザインとアイデアの力でより楽しく、より活性化させていきたいと考えている。

“捨てない空間づくり”へ

ドに生まれ変わらせた。モレラ岐阜は、テナント退店時の残置物はそのまま残してもよいという契約を交わしており、スペースは施設側から委託を受けてこの残置物を活用することで、本来捨てるはずだったものに新たな役割を与えた。

制作した木製のプラントーカーバーとサインスタンドは、現場で簡単に組み立てや分解ができ、また再利用しやすいように、金属製のものは極力使わずに、できるだけ同じ素材を組み合わせた。制作時には、元のテナントの意匠が分らないようにしながらもリニューアル感を出すことで、来館客にも廃材活用を分かちてもらえるように工夫したという。

モレラ岐阜は以前からSDGsの取り組みに積極的で、過去にスペースと組んで地元企業から規格外材料などの提供を受け、共用通路のベンチを制作・設置したり、近隣の学生や地元住民とともに壁面を装飾するワークショップを開催するなどしてきた。こうした施設側の意欲もあり、今回の取り組みも円滑に進めることができたそうだ。

スペース事業戦略室リプロダクト推進室長の龍澤知佳氏は、今回の取り組みについて「モレラ岐阜もSDGsの取り組みを継続されており、残置物の再利用は大変喜んでいただけた。他の施設にも広げていきたい」と話す。また、制作物や設置場所は、その施設のニーズやリクエストに柔軟に対応し、従業員休憩室など

共用部以外も想定しているという。また、今後の事業展開については「まずは自社工場がある東海地区を中心に少しずつ取り組んでいきたい。それと同時に、全国にも拡大させていきたい」（龍澤氏）とコメントしている。さらに「施設によって回収できるものが異なるため、一品ごとに、何をどうするかを考える必要がある。こうした経験を積み重ねながら、捨てない空間づくりや、ゴミとして捨てられるものをレスキューできる体制を整えたい。商業施設はオフィスなど他のアセットと比べてもリユース市場が確立されていないため、事例を増やして可能性を広げていきたい」（龍澤氏）と話した。

